

「考え、議論する道徳」をふまえた「道徳教育の理論と指導法」

後藤美乃理

要 旨

「特別の教科 道徳」では、従来の道徳教育から「考え、議論する道徳」への転換が求められている。こうした転換に応答する手段として近年、子どものための哲学、または子どもとする哲学、こども哲学（Philosophy for/with Children, 以下P4wC）と呼ばれる哲学対話の実践が注目を浴びている。2022年度後期に行われた「道徳教育の理論と指導法」では、この哲学対話に関する理論と実践を授業に導入した。本稿は、その取り組みに若干の考察を加えたものである。

キーワード：道徳教育、考え、議論する道徳、子どものための哲学、P4wC

1. はじめに

本稿では、「考え、議論する道徳」をふまえ実施した「道徳教育の理論と指導法」の授業実践を記録し、授業全体から見出されたいくつかの論点と課題について記す。その際に授業実践に取り入れた哲学対話の実践についての検討を加える。

小学校では2018年度から、中学校では2019年度から「特別の教科 道徳」として実施が開始された。これに伴い、読み物資料を用い、その登場人物の心情を読み取ったり、望ましい道徳的価値について感想を書いたりすることに留まる傾向があった従来型の道徳の授業から、一人一人が問題と向き合う、「考え、議論する道徳」への転換が求められている。そしてこの「考え、議論する道徳」のためのアプローチとして注目されているのが子どものための哲学あるいは子どもと共にする哲学、こども哲学（Philosophy for/with Children, 以下P4wC）と呼ばれる哲学対話のアプローチである。

本稿では、哲学対話のアプローチをふまえ展開した2022年後期の「道徳教育の理論と指導法」の

授業実践を記録し、授業全体から見出されたいくつかの論点と課題について記す。その際に授業実践に取り入れた哲学対話の実践についての検討を加える。具体的には、まず授業の実施形態について簡単に述べた後、P4wCと呼ばれる哲学対話のアプローチについてふれ、これをふまえてどのような授業づくりをおこなったのか、またそこから見出された論点と課題について書き記す。

2. 授業の実施形態

本節ではまず、2022年度後期に行われた「道徳教育の理論と指導法」の授業がいかに実施されたのかを簡単に振り返る。以下は、道徳教育の理論と指導法のシラバスから各回の授業テーマを抜粋したものである。前半1回～7回までは知識理解、理論に関するものが中心となっており、後半8回～15回は7回までに学んだ知識や理論を活用し、模擬授業の実践を行うことを目標に、履修者自身による授業づくりを中心に行なった。

1. ガイダンス、「道徳」とは何か

2. 現代社会と道徳的価値
3. 日本における道徳教育の歴史
4. 諸外国における道徳教育
5. 道徳性の発達：子どもの道徳性発達の諸理論
6. 道徳教育と宗教
7. 学校における道徳教育（学習指導要領，指導計画，学習指導案）
8. 道徳授業の理論と実践
9. 道徳授業の指導方法
10. 道徳教育の実践例
11. 学習指導案の作成
12. 模擬授業の発表と授業検討
13. 模擬授業の発表と授業検討
14. 模擬授業の発表と授業検討
15. 振り返りとまとめ

次に授業方法について簡単にふれる。授業はパワーポイントにて作成した資料を事前にWebclassにて配布し、授業中は資料をスクリーンに映しながら授業を進めた。また、授業内でグループディスカッションやグループワークに取り組んでもらうため、毎授業の開始時にランダムな3, 4人のグループを作成した。

また模擬授業の発表回を除く回では、授業の始めに、後述する「ミニ哲学対話」の時間を取り、様々な教育に関する問いについてグループ毎に対話をおこなった。この「ミニ哲学対話」の実践に関わって、お互いに問い合う質問ゲームや、問いづくりのワークなどをおこなった。詳細は後述するが、哲学対話において問いがあること、ならびに問い合うことは実践の要の一つである。

さらに授業後にはWebclassを活用し、こちらで提示した課題や授業へのコメントの記入の課題を課した。課題では、授業を受けて考えたことなどに加えて、考えてみたい問いについての記入を求めた。この問いについては、多くの履修者が取り上げたテーマや、次回授業と関連のあるものに

ついて、次の授業の始めの「ミニ哲学対話」の時間で取り扱う問いのアイデアとして活用した。

3. P4wCとは

本節では、前節において取り上げた「ミニ哲学対話」の理論的背景にあるP4wCについて、その理論と実践の概要について簡単に記す。P4wCとは、M. リップマンによって展開されたPhilosophy for Children（略称は大文字のP4Cと表記）、その後ハワイでT. ジャクソンによって展開されたphilosophy for children（略称は小文字のp4cと表記）、リップマンに学んだK. ムリスが展開するPhilosophy with Children（PwC）、これらに加え世界各地で展開されている子どもとともに行う哲学対話実践を総合して指す名称である。

P4Cは、リップマンによって1970年代に展開された、対話を通して問いを掘り下げ、新しい意味や理解を発見したり、またさらなる問いを発見したりする教育方法または、カリキュラムを指す（Lipman et al. 1980:45=2015:86）。リップマンはP4Cの実践を、批判的に物事を捉えたり考えたりする思考力を身につけることを一つの目的として始めた（Ibid.）。しかし、現在では様々な実践を経て、P4wCは単なる批判的思考力の育成の道具としてではない実践、可能性が論じられている。

国内の道徳科における実践の広がりや、日本学術会議哲学委員会哲学・倫理・州教育分科会による報告書（2020）においても言及されている他、道徳科の教科書においても取り上げられるなどの広がりをみせている。河野はP4wCにおける哲学について以下のように述べた。

「身近なテーマや物語などを題材として、子どもたちが自分たち自身でテーマと問題を決め、意見を出し合って、問題についての考えを深め合いながらも、かならずしも結論は出

なくてもよい、といったタイプの対話的活動です」(河野 2021:16)

P4wCは大学などのアカデミックな場で行う哲学の授業とは異なり、哲学における営みの実践そのもの、つまり、考えること、問うことそのものを実践する哲学であり、こうした背景から、「考え、議論する道徳」における実践が検討、実施されている。

P4wCには教科書を使うもの、その場にいる参加者全員で問いを考え、探究するもの、絵本を使うもの、など様々な手法があるが、どの実践にも共通することは、問いがあること、そしてそれをみんなで考えるということである。特にP4wCにおける問いについては、「哲学対話を他の様々なコミュニケーションから区別する大きな特徴の一つは、共有された「問い」を中心に対話がなされる点」(馬場 2022:13)と述べられるなど、他の対話的实践と区別する際の特徴の一つとして取り上げられる。

4. 授業づくりとその課題

本節では、前節までに確認したP4wCをふまえ、実施した「道徳教育の理論と指導法」について、(1)これまでの道徳の授業との接続、(2)ミニ哲学対話、(3)「考え、議論する道徳」における教師、について焦点を当てて記述し、見出される課題について検討する。

4.1 これまでの道徳の授業との接続

まず、「考え、議論する道徳」についてこれまでの道徳の授業との接続の観点から振り返っていく。履修生たちの多くは総合的な学習の時間やその他様々な科目の中でアクティブ・ラーニング型の授業の経験が一定ある一方で、道徳については従来型の授業に多く触れてきた世代である。そこ

で、授業では実際に行われた「考え、議論する道徳」の授業実践を紹介する他、授業者による「考え、議論する道徳」の模擬授業をおこなった上で、その学習指導案を共有した。この学習指導案の作成にあたり、従来型の道徳において中心的な発問と位置付けられる問いについて、P4wCをふまえ、児童生徒にとって考えたい問いとなること、また特定の価値観について学ぶのではなく、価値観についての議論をすることができるような問いとなることを留意点として提示した。

このような授業をふまえ、履修者たちによる模擬授業の実践をおこなった。履修者たちは自分が受けてきた従来型の道徳の形にとらわれず授業を作成し、実践した一方で、教師役として授業を行う際に、答えがわからないまま授業を終えるということへの抵抗感も見受けられた。P4wCでは答えが授業の終わりに出ることは保障されていない。こうした授業の形態は、数学などの教科の授業とは異なる特徴の一つである。従来型の道徳の授業だけでなく、他の教科との比較における授業づくりの留意点についても取り上げることによって、「考え、議論する道徳」への理解を深める機会について検討する必要がある。

4.2 ミニ哲学対話

「2 授業の実施形態」で触れた通り、本授業では毎回授業の始めに「ミニ哲学対話」の時間を取り、グループ毎に対話をおこなった。また、「4. 諸外国における道徳教育」においては学校におけるP4wCの実践について紹介した後、実際に授業で行うのと同程度の時間を取り、哲学対話を行なった。

「ミニ哲学対話」の実践に関わって、お互いに問い合う質問ゲームや、問いづくりのワークなどをおこなった。質問ゲームでは「なぜ」「どうして」「たとえば」「もしも」などの質問の形式をパワーポイントで提示し、意識的に質問の言葉を使

うことによって、問うことの練習をした。また問いづくりのワークではグループ毎に作成した問いを共有するなどして、考えてみたくなるおもしろい問いとはどのような問いなのか、ということについて探究した。毎授業の開始に問いを意識することによって、授業終了後のコメントにおいて授業内容に関する問いが記入され、次回授業における「ミニ哲学対話」の題材となることもあった。

また本授業内におけるグループワークやグループディスカッションにおいても、問いを意識した話し合いの様子が観察された。「ミニ哲学対話」は「考え、議論する道徳」の実践形態を体験することが一つのねらいであったが、本授業におけるアクティブラーニング型の授業方法を後押しする側面もみられた。しかしこの一方で、ディスカッションにおいてその前提を丁寧に検討したり、問いを吟味したりすることによって、時間内にグループワークを終えることが難しいこともあった。グループワークの内容やその発表方法について工夫を検討する必要がある。

4.3 「考え、議論する道徳」における教師

P4wCにおいて、教師はファシリテーターとしての役割を担う。しかし、教師がより良い方法や答えを知っている上で子どもたちをファシリテートするのではなく、教師もまたわからない問いについて子どもと共に考える立場にある点において特徴がある。つまり、対話が始まる時に子ども同様に教師もまたその到達点を知らない。

履修者たちは「ミニ哲学対話」を通して、わからないまま時間を終えること、答えが出ないまま対話を終了することを経験した。このことによって履修者たちには、「考え、議論する道徳」においてその時間内に答えを出すのではなく、考えること、議論することそのものについて着目し、考えること、児童生徒同士が議論することを重視する視点がもたらされた。しかし、模擬授業の実

践の段階となったとき、教師の立ち位置となった履修者がそのふるまい方に戸惑う様子が観察された。これまで履修者たちが観察してきた教師像とは異なる、共に探究する教師とはどのようにふるまうのか、といった問いがコメントに記されていた。分からないままの時間について、授業を受ける側時には受容できていたことに対して、教師の側に立った時にはその受容が容易ではなかった、という戸惑いである。

この戸惑いについて、事前に探究する教師のふるまいについて考える機会を設ける、などの対応が考えられる。しかし、こうした戸惑いに直面し、それを履修者自身の手によって問題視し、問いという形にしたことは、P4wCの実践において重要な教師自身も問いをもつこと、に該当するようにも見受けられる。P4wCでは、教師もまた分からない問いについて子どもたちと共に考えることから、子どもたちが自分の問いについて探究し、それについていく教師、あるいはそれを答えまで導く教師とは異なる。子どもたちと探究を共にするにあたり、子どもたちだけが問いをもつのではなく、教師も問いをもつことによって、共に探究することができる。子どもたちが考えたいと思うだけでなく、教師もまた問いについて考えたいと思うことによって、子どもと共に探究をすすめる。子どもと共に考え、議論する営みにおいて、教師自身が問いをもつことは重要である。

また、模擬授業を実践し、教師役として思うような立ち振る舞いができなかった履修者にとって、模擬授業は失敗であると感じたかもしれない。しかし、模擬授業は模擬であり先に失敗をすることによって本番の授業でよりよい授業を実施するためのものである。従って模擬授業においては、適切に失敗をすることが重要である。適切な失敗あるいは失敗を失敗として次に活用するために自分自身の課題を明確にするために、問いをもつことがその手助けとなることについて、事前に

触れておく機会を持つことを検討したい。

5. おわりに

本稿では、「考え、議論する道徳」をふまえ実施した「道徳教育の理論と指導法」の授業実践について、それを記録すると共に、その課題について述べた。これから教師になろうとする教職課程履修者自身が、考え、議論することを経験したことが、そして自分自身の問いに向き合い続けたことが、道徳の授業を構築する際に、子どもと共に考えたいこと、子どもと共に聞きたいことへと向かう手引きとなることを願う。

参考文献

- Lipman, M., Sharp, A.M., and Oscanyan, F.S.(1980). *Philosophy in the Classroom*. Temple University. [=河野哲也, 清水将吾監訳 (2015)『子どものための哲学授業』河出書房新社]
- 河野哲也 (2021)『じぶんで考えじぶんで話せることもを育てる哲学レッスン 増補版』河出書房.
- 哲学委員会哲学・倫理・宗教教育分科会 (2020)「道徳科において「考え、議論する」教育を推進するために」日本学術会議 哲学委員会 哲学・倫理・宗教教育分科会.
- 馬場智一 (2022)「哲学対話における「問い」の難しさ」『思考と対話』 4, 12-22.
- 文部科学省 (2017)『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』文部科学省.